

劉勰「文心雕龍序志」札記

福井佳夫

本稿は六朝の齊・梁の二代にいきた劉勰、あざなは彦和（生没年未詳。五世紀後半～六世紀前半）の手になる『文心雕龍』の序志篇（二書の序文に相当する）を讀解し、その氣づきをまとめたものである。

テキストは、詹鍇氏のご労作『文心雕龍義證』（上海古籍出版社 一九八九）中のものをもちいた（ただし句讀は適宜、私意によってうちかえた）。この『義證』のテキストは、定評ある王利器『文心雕龍校證』のそれを踏襲したものだ。この『義證』の魅力は、テキストもさることながら、注釈がひじょうに充実していることにもある。同書の「序例」でもいうように、この書は、詹鍇氏ご自身の注解はもちろん収録するが、氏以前の各種の注釈や研究の類も網羅的に搜求し、その「衆家の長ぜるを兼採」したものだ。その意味ではいわば、集解の性質を有したものだといつてよい。札記をつくるさいは、この『義證』中に収録された諸家の注釈もおおいに参照させていただいた。

この『義證』以外でとくに参照したものととして、李日剛『文心雕龍辭詮』（国立編訳館中華叢書編審委員会

一九八二」と呉林伯『文心雕龍義疏』（武漢大学出版社 二〇〇二）をあげておこう。この二書は、「義證」中に部分的にひかれてはいるが「有用な解説がおおかつたので、つねに机上において参照させていたのだ。

ただ本稿は、典拠さがしや解釈したいが目的ではないので、字句の典拠などは、いちいち指摘していない。そのかわり、『文心雕龍序志』の行文を一篇の文章作品としてみたとき、作者の用心がいかにほどこされているか、いかにすぐれて（おとつて）いるかなどについては、せいせい注意をはらって指摘しておいた。

なお札記中、私なりの解釈を提示するという意味で、日本語の訳文もそえておいた。この訳文をつくるにさいしては、もちろん日本の興膳宏、陶淵明、文心雕龍（筑摩書房 世界古典文学全集25 一九六八）と戸田浩暁『文心雕龍（下）』（明治書院 新釈漢文大系65 一九七八）の両書を座右において、つねに参照させていただいた。これらの先学にあつく御礼もうしあげる。

第一段 書名の由来

夫文心者、言為文之用心也。昔「涓子琴心、心哉美矣、故用之焉。

王孫巧心

古来文章、以雕縵成体。豈取騶奭之群言雕龍也。

書名の「文心」とは、文学を創作するさいの心配りをいう。むかし、涓子はおのが著に『琴心』と命名し、王孫は『巧心』と名づけた。この「心」たるや、なんとすばらしいことか。だから本書でも、この字をつかったのだ。

また文学はふるくから、文飾をほどこしてかかれるものだった。「だから「文飾をほどこす」意の「雕龍」の語をつかったのであり、」とつして、ただ騶爽すうせきの文が「龍を雕ほる」と称された故事だけを意識して、書名に「雕龍」の語をつかったはずがあるつか。

この第一段は、『文心雕龍』の命名の由来を説明したものである。この書名にも、「文章が美的になるよう、心をくばるべし」という劉勰の文学観が、よく反映されている。

まず前半六句は、書名の前半「文心」についてのべる。二句目の「用心」は、心配りの意。ふるくから、先秦の『論語』陽貨などの用例があるが、劉勰はおそらくそれらでなく、陸機「文賦」の「余每觀才士之所作、窃有以得其用心」（私は才ある文人の作をよむことに、彼らの創作上の心配りについて、自分なりに了解することがあった、の意）のほうを意識していたらう。つまり、一般的な意味での心配りの意でなく、文学創作のさいのそれをいうのだらう。

そして「心」字を書名にもちいた前例として、涓子『琴心』および王孫『巧心』という書物（いま、ともに佚）を提示している。なお、かつて范文瀾『文心雕龍注』は「文心」の語について、『阿毗曇心序』の一節をひいて仏教との相関を主張していたが、現在ではあまり祖述者はいないようだ。

つづく「心哉美矣」句は、心字はすばらしいの意であり、訓読すれば「心たるや美なるかな」だらうか。この句、「哉」「矣」の字をもちいて、つよい語気を表現しているのに注意しよう。ここにかぎらず、この序志篇では同種の助字が多用されていて、雄弁な演説をきくかのような感じがしなくもない。『文心雕龍』をかきあげたばかりの、劉勰のつよい自負がうかがえよう。

つぎの「古来」三句は、書名の後半「雕龍」への説明である。初二句「古来文章、以雕縟成体」は、六朝の文

学精神を直言したものだ。「文学はふるくから、文飾をほどこしてかかれるものだった」という発言は、美を重視する当時の文学観を端的にのべたものといえ、たしかに注目されるべきだろう。ただこの部分に関して、黄侃の「札記」が「この二句は、後段の 文繡聲悅、離本弥甚」という発言と齟齬があるようだ。劉勰の意図は、文学は文飾を重視すべきだが、極端になつてはならぬということなのだろ」と注しているのは、傾聴すべき意見である。つまり「文飾は必須だが、ほどほどであるべき」というのが、劉勰の考えなのだろう。

つづく「豈取騶夷之群言雕龍也」句は、書名後半の「雕龍」について説明している。問題になるのは、「豈取……也」（豈に……に取らんや）の解釈である。これは、ふつうには反語と解釈されよう。するとこの句は、「雕龍の語は」どうして騶夷すうせきの文が「龍を雕ほる」と称された故事からとろうか、そんなはずはない」の意となるべきだろう。だがこの句については、そんなにかんたんではない。諸家のあいだでおおきく、(1)「騶夷の故事からとらぬ」と否定ふうに解する派と、(2)「騶夷の故事からとらぬ」と肯定ふうに解する派とにわかれて、現在でも決着がついていないのである。つまり右の(1)否定派は反語ととり、(2)肯定派は反語ととらず、たがいに反対の立場にたっているのだ。こうして、有名な「文心雕龍」の「雕龍」の語が、騶夷の故事に由来するのかもしれないのか、現在でもはっきりしていないのである（張灯「文心雕龍序志 疑義弁析」天津師大報一九九五 四も参照のこと）。

ただ両派とも、「雕龍」の語が、先秦の騶夷という人物に由来する、という点では一致している。それは、
夷也文具難施。……故齊人頌曰、……雕龍夷。（『史記』孟荀列伝）

騶夷は、その文章はととのっているが、実用には適さなかつた。……だから齊の人びとは、「……龍紋をほる」「ごとき華麗な文章をつづる」「騶夷」とたたえた。

という話である。これからすると、「彫龍」は「龍の模様を彫刻するように、文章を巧緻にかざる」の意となる。すると意味的には、劉勰の書名にふさわしいといつてよい。それなのになぜ、騷爽と関係がないとする解釈も、でてくるのだろうか。それは私見によれば、この「彫龍爽」への解釈のしかたがことなるからだろう。

まず(1)否定派、「彫龍の語は」彫龍の故事からとらない」とする人びとは、「彫龍爽」を貶辞と解するのだろうか。すなわち、右の典拠「爽也文具難施」中の「難施」(実用には適さない)に注目して、過度に華麗で実用に適さないという方向で解したわけだ。すると「文心彫龍」は名著だから、そんな貶辞ふう解釈はすべきではない。だから否定に解すべきだ、となったのだろうか。いっぽう(2)肯定派、「彫龍の語は」彫龍の故事からとった」とする人びとは、「彫龍爽」を褒辞と解するのだろうか。すなわち、右の典拠「爽也文具難施」中の「文具」(文章はととのっている)に注目して、華麗ですばらしいという方向で解するわけだ。すると「文心彫龍」は名著だから、褒辞たる「彫龍爽」に由来するとかんがえるのだろうか。

主要な見かたは以上の二とおりだが、もうひとつ第三の解釈も提唱されている。それはいわば、右の(1)否定派と(2)肯定派の中間にたつものである。すなわち基本的には「豈取……也」を反語と解し、否定派に左袒するのだが、しかし純粹の反語でなく、限定のニュアンスもまじえ、「どうしてた、だ……だけ、からとろうか、いやそうではない」と解するのだ。たとえば李白剛『辭詮』では、この句を「ただ、騷爽の華美な文章の故事に、だけ、依拠して、彫龍」という名にしたのではない」と解している。「こつ解すると、「彫龍」の語は騷爽の故事と、すこしは関係があるということになる。やや折衷的ではあるが、この解釈だったら、いろんな疑問もつまく説明できるよつである。右の訳文では、こつした方向で解釈しておいた。

第二段 著作の意義

夫 宇宙綿邈、黎獻紛雜。拔萃出類、智術而已。

歲月飄忽、性靈不屆。騰声飛実、制作而已。

夫 肖貌天地、擬耳目於日月、其超出万物、亦已靈矣。

稟性五才、方声氣乎風雷。

形同草木之脆、是以君子処世、樹徳建言。豈好弁哉、不得已也。

名踰金石之堅。

天下は広大であり、賢人もあまた存在している。そうしたなか、世人のなかから傑出するには、知謀を駆使するしかない。歲月は忽としてすぎさり、ひとの命もこの世にながくとどまれない。そうしたなか、名声をあげ功績をのこすには、著述にはげむしかない。

ひとは天地に姿をかたどり、五行より性をさすけられている。耳や目はあたかも日月に似て、声や息はちょうど風雷のようなもの。ひとが万物のうえにたつのは、それ自身がかく靈妙であるからだ。形体は草木のようにもろいが、名声は金石のかたさをうわまわる。だから君子はこの世に処するや、徳行をなし卓言をのこそうとするのだ。それはべつに弁論がすきなわけではない、それしか方法がないからなのである。この第二段は、著述をかきのこすことの意義を強調したものである。ここでは、「著述にはげんで名をあげ功をのこす」という儒家的価値観が主張されている。このあたりの行文は、典拠からの字句をつまくとりこんで構

成したものがおおい。

まず前半八句は、四句どうしが対応している。六朝美文ではおおく隔句対までであり、こんなに息の長偶対はめずらしい。初四句はひろい天下のなかで傑出するすべをかたり、後四句はながい時間のなかで冠絶する方法をのべている。いずれも、ひとが功業をうちたてるには、頭脳を駆使するしかないとのべたものである。

第一句の「宇宙」の語に、天下（空間）のみでなく、時間の意もたせる解もあるが、この語が「歲月」（時間）と対応するからには、天下のみの意だとすべきだろう。つづく「黎献」「拔萃出類」は、ともに経書に典をもつ。前者は『尚書』益稷の「万邦黎献、共惟帝臣」（万邦のもろもろの賢人たちは、みな帝の臣下です、の意）、後者は『孟子』公孫丑上の「出於其類、拔乎其萃」（同類中から突出し、草むらからぬぎんでる、の意）に、それぞれ由来している。

いっぽう「歲月」四句は、ながい時間のなかで卓立するには、著述によるしかないとのべたもの。このあたりは、曹丕「典論論文」の「年壽有時而尽、榮樂止乎其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。是以古之作者、寄身於翰墨、見意於篇籍」（ひとは寿命にかぎりがあつて死んでゆき、その栄華とて一代かぎりのものにすぎない。かく寿命と栄華とは、かならずつきはてるといふ点で、文学の永遠さにはおよばない。かくして、過去の文人たちは、文辞の創作に専念して、書籍のなかで自己を表現しようとした、の意）のなげきとも、よく似ているようだ。六朝文人特有の功業観なのだろうか。

また「性靈」は精神とか心の働きとかの意。対応する「黎献」が賢人の意だったので、ここの「性靈」も精神を有した人間と解してよからう。それが「不居」（とどまらない）というのは、悠久の時間の流れにあつて、ひとはすぐ死んでしまうものだ、ということである。つづく「騰声飛实」句は、司馬相如「封禅文」の「蜚英声、

騰茂実」(名声をとばし、徳望をたてる、の意)にもとづいた表現だろう。この二句に適宜手をくわえれば、すぐ「騰声飛実」の語はできる。

つぎの「制作」は、文学もふくめた著述行為をさすのだろう。すると対応する「智術」も、通常の知謀(たとえば、天下統一をなす知謀の類)をさすのではなく、著述をつづるための知謀と解したほうがよい。ただし呉林伯「義疏」は、知謀があつてこそ著述が可能になるのであり、この八句は並列の対偶ではないと主張している。そういうわれればそのとおりだが、しかし流水対ふうに意味が進展しているのは、この「智術 制作」だけにすぎない。これ以外の対応、「宇宙綿邈↪歲月飄忽」「黎献紛雜↪性靈不居」「拔萃出類↪騰声飛実」は、すべて正対ぶうの並列である。すると、この「智術 制作」だけをとりあげて並列でないと主張するのは、すこしくるしい理屈だとせねばならない。ここは「ひとが功業をうちたてるには、頭脳を駆使するしかない」とのべた、四句ずつの正対だと解しておこう。

つづく「夫有肖貌天地」四句は、ひとを「天地」に比擬したもので、諸家が主張するように、董仲舒の天人合一理論、具体的には『春秋繁露』人副天数篇の議論などに依拠したものでしょう(ながいので引用は略)。かく雄大な天地にも比擬されるべき人間は、もとより靈妙な存在にきまつているという議論が、つぎの「其超出万物、亦已靈矣」二句である。このあたりは、『尚書』泰誓上の「惟天地万物父母、惟人万物之靈」(天地は万物の父母であり、人間は万物の靈長である、の意)などにもとづいた表現だろう。要するに「ひとは天地に似せてつくられた。だから万物のなかで傑出した存在なのだ」という理屈だ。このあたりの理屈は、『文心雕龍』原道篇でも「惟人參之、性靈所鍾、是謂三才。為五行之秀、実天地之心」(ひとは天地と肩をならべられる存在であり、また天地の精気の集合体でもあるので、天、地、人をあわせて三才といわれる。つまりひとは、五行の秀気よりなり、

天地の心を有しているのだ」とのべられており、劉勰お得意の議論だったのだろう。

この天人合一の思想は周知のように、中国では董仲舒以後、普遍的なものとなり、いろんなところで言及されてきている。ただ私は疑問におもふのだが、六朝にいきっていた劉勰は、そうした、天と人とが一致するという神秘的な考えを、ほんとうに心から信じてかく叙したのだろうか。それとも、かつて董仲舒がそういつていたし、また自分が文学論を展開するのにも都合がいいので、本気では信じてないが、まあ建前上そういうことにしておく、という程度だったのだろうか。このあたりはなかなか微妙なところで、いずれともきめがたい。私の推測は後者のほうにかたむくのだが、しかしそうだと主張する根拠もない。とりあえず、右のように訳しておいた。

つづく「形同」二句は、そうした靈妙な存在たるひとの、卓越はんついでぶりをかたつたもの。ここの「形体は草木のようにもろいが、名声は金石のかたさをつわまわる」は、内容的には反対であり、なかなか巧妙なものといえよう。『勸諭』によると、「この部分は古詩十九首の「盛衰各有時、立身苦不早。人生非金石、豈能長壽考。奄忽隨物化、榮名以為宝」（盛衰にはきまつた時期があるので、ひとははやく立身しないのをなやまねばならぬ。命は金石ではないので、長寿をえられるはずはない。ひとはものとともにすぐ死ぬので、死後の名声をたいせつにしよ、の意）に依拠するという。発想としては、たしかに似ている。また「樹徳建言」句は、『左氏伝』襄公二十四年の「大上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂不朽」（最上は徳をうちたて、つぎは功をあげ、そのつぎはよきことばをのこす。これらは年月がすぎてもすたれない。これを不朽という、の意）によつたものだろう。君子は「最上は立德、次善は立功、三善は立言」をめざすべしという

徳∨功∨言

の価値基準は、中国の儒家的な人生訓として、あまなくしられたものである。この句は、劉勰がそうした考えか

たに忠実であり、つまり儒家的価値観を有していたことを示唆している。おわりの「豈好」二句は、諸家が指摘するように、『孟子』滕文公下の「予豈好弁哉、予不得已也」（私はどうして弁舌をこのもつか。やむをえず弁じているだけだ、の意）を使用したもの。ほとんど典拠そのままであり、ややくふうのない措辞である。

第三段 執筆の動機

予生七齡、乃夢彩雲若錦、則攀而採之。齒在踰立、則嘗夜夢、執丹漆之礼器、随仲尼而南行。旦而寤、迺怡然而喜。大哉聖人之難見也、乃小子之垂夢歟。

自生人以來、未有如夫子者也。敷讚聖旨、莫若注經。而馬鄭諸儒、弘之已精。就有深解、未足立家。唯文章之用、實經典枝條。

〔五礼資之以成、君臣所以炳煥、詳其本源、莫非經典。六典因之致用、軍国所以昭明。〕

而去聖久遠、文体解散。辞人愛奇、言貴浮詭、飾羽尚画、文繡擊悅、離本弥甚、將遂訛濫。

蓋「周書論辞、貴乎体要、辞訓之異、宜体於要。於是擗筆和墨、乃始論文。」

〔尼父陳訓、惡乎異端。〕

私は七歳のとき夢のなかで、錦のごとき彩雲があらわれ、よじのぼってそれを手にとった。また三十歳すぎのころ、ある夜の夢に、あかい漆ぬりの祭器をもって、孔子のあとをついて南方へいった。朝めざめたとき、私はうれしかった。すこいではないか。聖人にはめつたにお会いできぬものなのに、私ごとき者の夢のなかにあらわれてくれたのだ。

この世に人類があらわれて以来、孔子のごとき偉大な者はいなかった。そのみ教えを宣揚するには、經書の注解をつくるのがいちばんだろう。しかし大儒の馬融や鄭玄らが、すでに精細な注解をかいているので、たとえ私にふかい解釈があつたとしても、一家をたてるというわけにはゆかぬ。

ただ文学の効用たるや、經書の補佐になりうるものだ。五つの礼法は文学によって成立し、六つの職掌もこれによって用をなし、また君臣の關係は明瞭になり、軍事や經國の道もはっきりしてくるのである。そうした文学の効用のもとをただせば、「その本体たる」經書のおかげでないものはない。

だが聖人の時代からといひ現今は、文学のスタイルはおとろえてしまった。文人たちは奇拔さをこのみ、その文辞は輕薄そのもの。「美麗な」羽にさらに模様をほどこし、帯や手拭いによけいなぬいとりをするばかりで、「經書の補佐といつ」本質からはなれて、混乱の極にいたつてしまつてゐる。

おもつに『尚書』では文辞を論じて、簡要なることを重視した。孔子は訓戒をのべて、異端の文をまなぶことを禁じられた。かく教えは各様にことなるが、そうした古言の要点は把握しておくべきだろう。そこで私は筆をとり、文学論の執筆を開始したのである。

この第三段は、『文心雕龍』執筆のきつかけをのべたものである。この部分の論旨は、「孔子は偉大だ。その教えは經書にある。だが經書注解では自分の出番はない。文学は經書の補佐だ。その文学はいま混乱している。自分がただしき文学を論じよう」というものだ。ここでも孔子や經書を尊崇する、儒家ふうの発言がめだつてゐる。

まずは二つの夢の話がかたられる。はじめは、夢のなかで「錦のごとき彩雲」をとつた話。ここでの錦は、江淹が「夢のなかで、張協と名のる男に錦を手わたしたところ、文才がおとろえてしまった」といふ話によく似る。

これらでの錦や彩雲は、文学的才能を意味している。つまり劉勰は七歳のとき、天から文学的才能をさずかったといたいのだろう。するとこの夢の話、序志篇の末尾「茫茫」四句とも対応しつつ、おのが文才への自負を暗示したもののなかもしれない（後述）。

つきは、夢のなかで孔子につきしたがった話。「踰立」の「立」は、『論語』為政の「三十にして立つ」をふまえて三十歳を意味する。すると「踰立」は三十歳すぎ、つまり三十一や三十二歳ごろをささう。そのころ劉勰は、あかい漆ぬりの祭器をもって、孔子にしたがって南行した夢をみたのである。ここの「南行」は、劉勰の先祖が永嘉の乱をさけて、江南へうつってきたことをさすのか、それともなにか別個の典拠をふまえるのか、よくわからない。『義疏』はこの夢中の「南行」を、「南岳で天を祭祀し、帝を称する」こととし、劉勰は、自分がその「孔子にも比すべき」聖王を補佐して、自己の政治的抱負を実現させることを、寓したものとす。つまり自己の政治的野心を暗示した夢であり、「このとき劉勰はその身は山寺にあつたが、心は政治の場をはせめぐっていた」と解するのである。この見かた、劉勰に仕官への野心が存していたのは事実だろうが、はたしてここまで断言していいのか、すこし不安もないではない。ただ劉勰がなにを寓したにせよ、この夢の話は、諸家が指摘するように、孔子つまり儒教への尊崇をかたつたものと解して大過なからう。

この孔子の夢をみてよろこんだというのが、「旦而寤」以下四句である。このうちの「大哉聖人之難見也」と「乃小子之垂夢歟」とは、もし前後の助字の字数がおなじだったら、

「聖人之難見也、
小子之垂夢歟。」

のごとき対偶になるところだが、あえてととのえていない。もし「文賦」中にこうした記述があつたなら、陸機

はおそらく適宜、助字を添削して対偶にしたことだろう。このあたり、両人の文学的資質の違いを暗示しているが、その執筆意図の相違もしめすものだろう。劉勰は陸機のごとく、文人として「文学を論じた」賦をつづっているのではない。儒家の徒として、「経書の補佐たる」文学のあるべきすがたを論じているのである。

つづく「自生人以来、未有如夫子者也」は、「孟子」公孫丑上の「自生民以来、未有盛於孔子也」をもじった表現。すぐうえの「拔萃出類、智術而已」でも、これとおなじ「孟子」をもちいていた。「敷讚聖旨、莫若注経」というのは、孔子が経書作成に関与したので、孔子の教えは経書のなかにつまんでいる、という前提にたつたのだろう。だから「そのみ教えを宣揚するには、経書の注解をつくるのがいちばん」なのである。「就有深解」の「就」は「たとえ……であっても」の意であり、やや口語ぶつな言いかたである。この用法、劉勰がかく美文のなかで使用するからには、この時期には、それほど口語的には感じられなかったのだろう。

「唯文章之用」以下から、ようやく文学の話題につづってくる。経書注解は、馬融や鄭玄らがおこなっているから、次善の策として文学論をつづつたという論理である。話題を「孔子 経書 文学」とスライドさせてゆき、このあたりから自分が文学論、つまり「文心雕龍」をつづつた動機を説明しようとするわけだ。初二句「唯文章之用、実經典枝條」の、文学の効用は経書の「枝條」（補佐、の意）になりうる、という発想は、宗経篇の「文能宗経」（文学は五経を宗主とする、の意）や、諸子篇の「枝條五経」（諸子百家の書は五経の枝條にあたる、の意）の発言と、同種のものとしてよからう。儒家的価値観を有する劉勰から見ると、経書が礼楽のトップの地位にあり、その補佐として諸子や文学が存在しているのだろう。

つづく「五礼資之」云々の四句は、実社会における文学の効用をかたっている。こうした文学の効用は、のちに北斉の顔之推『顔氏家訓』文章篇において、いっそう詳細に説明されることになる。そうした文学の多様な効

用の源をただせば、けつきよく経書にゆきつくというのが、「詳其本源、莫非經典」二句である。このあたりの議論は、『文心雕龍』の徵聖篇や宗經篇でも主張されるものであり、序志篇の記述はそこでの議論を要約したものとかんがえてよからう。

「而去聖久遠」の「而」は、逆接をあらわす。文学は経書の補佐だったが、「しかしながら現今は」という感じである。「而去聖久遠」の句は、『漢書』芸文志に「方今去聖久遠、道術缺廢、無所更索」（聖人の世をとおくさつたいま、聖人の道はすたれ、もはや追求しようもない、の意）とあるなど、相似した言い回しがいくつかみえる。以下、近代の文学の混乱ぶりがかたられてゆく。「文体解散」の「解散」は、褻（束縛からのがれる）とも、賤（解体してちりぢりになる）とも、どちらの意にも解せるが、前後の文脈からみると賤のニュアンスとすべきだろう。「飾羽尚画」は、『莊子』列禦寇の「仲尼方且飾羽而画、從事華辭」（仲尼は羽をかざってさらに模様をくわえ、美辞麗句をならべたてている、の意）に、また「文繡鞶帨」は、『法言』寡見の「今之学也、非独為之華藻也、又從而繡其鞶帨」（いまの学問は、衣服に模様をえがくだけでなく、大帯や手拭いにも刺繡をほどこしているようなものだ、の意）に、それぞれ由来する。いずれも「よけいなことをする」の意である。ただこの種の発言や典故は、六朝の保守的な文学者が、宋齊に流行した華麗な美文を批判するときに、しばしばもちいるものであり、劉勰の専売特許というわけではない。

つぎの「周書論辭、貴乎体要」二句は、『尚書』畢命の「政貴有恒、辭尚体要」（政治では不変さがだいじであり、文章では簡要なのがよい、の意）を、また「尼父陳訓、惡乎異端」二句は、『論語』為政の「攻乎異端、斯害也巳」（異端の学問をまなぶのは、害でしかないぞ、の意）を、それぞれ意識してつづつたもの。後者の「異端」は、ここでは近時の文学の「奇」や「浮詭」などの傾向をさすのだろう。だが、つづく「辭訓之異、宜体於

要』二句のほうは、なかなか解釈がむづかしい。諸家の解釈もさまざまな方向に分岐しているが、私見によれば、牟世金『范注補正』の「聖人の教え（孔子の異端云々の発言）と經書中の議論（畢命中の簡要云々の記事）」とはことなっているが、これらの主要な精神はわきまえておかねばならぬ。宜体於要とは、そうしたことをいっただものである」という説明が、いちばん説得力がありそうだ。とりあえずこの解釈にしたがって、右の訳では「かく教えは『經書や聖人によって』各様にことなるが、そうした古言の要点（簡要さを重視する、異端をまなばず）は把握しておくべきだろう」と解しておいた。

難解な「辞訓論辞、貴乎体要」二句、いちおうは右のように解するが、よりこまかく解説しておこう。前句の「辞訓」の語は、直前の「辞」（「論辞」の「辞」と「訓」（「陳訓」の「訓」）をつけたものだとかんがえられる。「異」とは、その両者（『尚書』畢命と『論語』為政）のことなるところ、の意だろう。後句「宜体於要」は、右の「典拠たる」畢命の「体要」の用例に依拠しつつ、「宜しく要を体すべし」（大要を把握しておかねばならぬ）とつづつたとみなした。つまりおなじ「体要」の語だが、直前の句「貴乎体要」では「簡要なること」と名詞ふうに使用し、「宜体於要」では「大要を把握する」と動詞ふうにつかっていると解するのだ。これは同語にことなる意をもたせた、技巧的かつ遊戯的な用法だといってよい。劉勰は原道篇でも、「文」の語にあやと文章の意をかけて使用するなど、ときに同字異義ふうの技巧的な利用法をおこなっていたが、ここでは同種の利用法を遊戯的なニュアンスでおこなったのではないかとおもふ。さらにこの部分では「辞」「訓」「体」「要」「異」など、美文ではめずらしい同字重用がめだっている。そうしたところも、通常的美文叙法とはすこしちがったものだとつづつておこう。

第四段 文学批評簡史

詳観近代之論文者多矣。

至於 魏文述典、 応場文論、 仲洽流別、 各照隅隙、 或臧否当时之才、 或汎拳雅俗之旨、

陳思序書、 陸機文賦、 宏範翰林、 鮮観衢路、 或銓品前修之文、 或撮題篇章之意。

魏典密而不周、 応論華而疏略、 流別精而少功、

陳書弁而無当、 陸賦巧而碎乱、 翰林浅而寡要。

又 君山公幹之徒、 汎議文意、 往往間出、 並未能 振葉以尋根、 不述先哲之誥、

吉甫士龍之輩、 觀瀾而索源、 無益後生之慮。

近代の文学批評の著作をみわたすと、なかなかかすおおい。魏文帝の「典論」論文、陳思王曹植の書簡、応場の文学論、陸機の「文賦」、摯虞の「文章流別志論」、李充の「翰林論」などがあるが、これらは文学の一部を論じただけで、全体をみわたしたのではない。たとえば、当時の文人の才能を批評したり、先人の文学を論じたり、また雅俗の問題をとりあげたり、作品の趣意を解説したりしたただけだ。

じつさい、魏文帝の「典論」論文は緻密だが全体をみておらず、曹植の書簡は雄弁だが的はずれ。応場の文学論は華麗だが粗略すぎるし、陸機の「文賦」は巧緻だがぐだぐだしい。摯虞の「文章流別志論」は精細だがうまいとはいえず、李充の「翰林論」は簡略だが要点をつくっていない。さらに桓譚や劉楨、また応貞や陸雲らも、ひろく文学を論じて、しばしばよい見解も提起している。だがいずれの文学論も、葉

先から根元に、波頭から源流にと、根本をきわめつくしてはおらぬ。それでは先哲の教えを祖述することもできず、後学の創作に利することもないのである。

この第四段は、劉勰が、過去の文学論をふりかえりつつ、その良否を評論したものである。主要な文学論をひとつひとつとりあげて評しているが、そうした列挙ふう内容は対にしやすいので、この部分では対偶がおおくなっている。かく対偶で挙例されたものうち、応場の作や劉楨・応貞らの議論は未詳だが、それ以外の文学論は現在でものこっている。これからすると、当時の主要な文学論は、おおむね現までつたわっているとよからう。

さて、劉勰は「典論」ら前代の文学論の作者と作品を列挙したあと、「各照隅隙」句から過去の文学論を批評しはじめる。「各照」云々、「或臧否」云々、「或汎拳」云々、いずれも同種の内容を並列的に叙した正対である。まず「各照」二句で、総論ふう「文学の一部を論じたので、総体をみわたし」ていないと欠点を指摘し、「或臧否」以下の四句でその欠点を具体的に説明している。そうした文脈からみれば、この四句の「或」字は、六字句をくずしてでも、必要な助字だったといわねばならない。もしこの字がなかったならば、具体的指摘の「或臧否」四句が、総論ふう記述の「各照」二句と同列のものとみなされだろう。このあたり、なかなか周到な助字使用だといつてよい。

「魏典密而不周」以下の六句は、「だけれども×である」という言いかたで批評をおこなったものだ。この六句、いずれもに褒がきて×に貶がくる構造である。かく一長一短をあげてはいるが、けつきよくは「すべてよろしくない」という結論がきている。つづく「又君山公幹之徒」以下は、いわばその他大勢の文学論を、まとめとりあげたものだろう。ここの「往住間出」は訳しにくいが、「桓譚ら四人の批評は、しばしばよい見解も提

起している」の意味にとつた。

「並未能」の主語は、魏文帝「典論」論文から応貞、陸雲らまですべてをふくむのだろう。過去の文学批評では、「振葉以尋根、觀瀾而索源」がしゅうぶんできていない、というのである。この「振葉」云々の正対は、要するに「根源（たぶん経書のことだろう）までさかのぼって文学の発展をみとおすべし」と主張したもので、いわば劉勰の文学批評の奥義をかたつたものでもあるのに注意しよう。ただこの根源遡及の主張は、劉勰の創案によるものでない。彼が「巧緻だがくだくだしい」と批判する陸機「文賦」のなかに、「或因枝以振葉、或沿波而討源」（一篇の構成では、「枝 本旨 から葉 末節 にすんだり、波 末節 から水源 本旨 にたどりついたりする、の意）という一節があり、それを利用した表現なのである。陸機はこのことばを、一篇を構成するさいの要領として叙していたのだが、劉勰はそれを拡大し「字も多少かえて」、文学批評全体に適用させるべきだと主張しているのだ（劉勰のこうした根源遡及の重視については、興膳宏「文心雕龍と出三蔵記集 その秘められた交渉をめぐって」『中国の文学理論』筑摩書房 一九八八 かくわしい）。つまり劉勰は、いつぼうで「文賦」をくだくだしいと批判しておきながら、もういつぼうでは、ちゃっかりおのが批評の根幹に利用しているのである。なかなか興味ぶかいこととせねばならない。

五段 全体の構成

蓋文心之作也、本乎道。

師乎聖、酌乎緯、文之樞紐、亦云極矣。

体乎經、變乎騷。

若乃論文叙筆、則圍別区分。原始以表末、選文以定篇、上篇以上、綱領明矣。

「積名以章義、敷理以拳統、

至於割情析采、籠圈條貫。

「摛神性、

「苞會通、

「崇替於時序、

「惻悵於知音、

「凶風勢、

「閱声字、

「褒貶於才略、

「耿介於程器。

長懷序志、以馭群篇。下篇以下、毛目顯矣。

位理定名、彰乎大易之数、其為文用、四十九篇而已。

私が『文心雕龍』をつづるにあたっては、天地の道理にもとづいた（原道）。そして聖人を師とし（徵聖）、經書を骨格とし（宗經）、緯書を參酌し（正緯）、楚辭を活用した（弁騷）。以上によって文学の本質は、つくされたとおもつ。

また韻文や散文（無韻の文）を論じるさいには、きちんとジャンルごとに区別した。そして各ジャンルの源流と沿革をあきらかにし、名称を解釈してその含意を明確にした。また各ジャンルの代表作をえらんで批評をくわえ、筋道をたどりながら理想的ありかたを論じた。こうして本書前半では、ジャンルの要点が明確にできたとおもつ。

作品の内容や表現を分析するさいは（情采）、創作の道理を概説しようとかんがえた。そのため、想像力（神思）と作風（体性）についてのべ、力強さ（風骨）や調子（定勢）も考究し、また構成法（附会）や伝統（通变）との関連についてかたり、音律（声律）や用字法（練字）にも言及した。さらに時代による文学の盛衰に思いをいたし（時序）、文人の才能に褒貶の言をくだし（才略）、また評価のむつかしさに慨嘆し（知音）、文人の人間性にも率直な見解をのべてみた（程器）。そしてのが執筆趣意をじっくりふ

りかえって、全篇のまとめとしたのである。こうして本書後半で、創作の細目を明確にすることができたともつ。

かく各篇の排列を按配して篇名をさだめ、篇数は大易の数たる五十としたが、じっさいの文学論は「大行に応じて」四十九篇にすぎない。

この第五段は、全体の構成について説明したものである。用例のない語がおおく、なかなか意味がとりにくい。『文心雕龍』全篇をよくよんで、一書の体例を知悉している者には、意味が推察できるかもしれないが、そうでない者には、そうとう難解な文章にうつることだろう。

「文心之作也」は、訓読すれば「文心の作たるや……」でなく、「文心を之れ作るや……」のほつがよからう。劉勰はこの初二句で、『文心雕龍』をつづるさいには、「本乎道」(道に本づく)だったとのべている。この「本乎道」句、諸家が注するよつに、原道篇の内容をふまえていて、「天地の」道にもづく」の意だと解すべきだろう。おなじよつに、「師乎聖」句は徵聖篇の議論をふまえていて、「聖人を師とする」の意であり、「体乎經」句は宗經篇の議論をふまえていて、「經書を骨格とする」の意であり、また「酌乎緯」句は正緯篇の議論をふまえていて、「緯書を参酌する」の意であると、それぞれ解してよいだろう。

すると「変乎騷」も、「弁騷」篇をふまえるだろうと推察できるが、しかしこの「変」は、意味がわかりにくい。諸家の注釈をよんでも、あまり納得できるものはないようだ。未詳として訳さないわけにもいかないので、とりあえず対をなす「酌乎緯」(緯書を参酌し、の意)との関係から、「変」を「変通」(物事に応じて変化し、よく通じる。事を臨機応変に処する、の意)の意と解しておいた。そして、『楚辭』を融通無礙に変容させて活用した、の意に解したが、あまり自信はない。

「以上によって文学の本質は、つくされたとおもつ」というのが、「文之枢纽、亦云極矣」である。ここでも「矣」をつかつて、自信たっぷりに断言している。ここまでが冒頭五篇、すなわち「原道」「徵聖」「宗經」「正緯」「弁騷」の執筆趣意なのだが、これを「枢纽」というからには、劉勰にとってこの五篇は、とくに大事なものであったのだらう。

つづいて前半「をしめる二十五篇」の、この二十篇についての解説につづる。この二十篇は、当時の主要ジャンルをとりあげて論じたものだった。ここでは、そのジャンル論の執筆趣意をかたててゆく。まず「論文叙筆」は「論叙文筆」の互文だらう。すると韻文(文)も無韻の文(筆)もすべて論じる、の意となる。つづく「圍別区分」の「圍別」は用例がないが、垣でかこつてわかつ、の意だらう。すると「区分」と相同の意味であり、つまり「圍別区分」は「わかつ」意の類語を、並列したものとかんがえられる。

つづく「原始」以下の四句は、用例のない語がおおく、正確な解釈はなかなかむつかしい。それでも、現存するジャンル論の内容と照会させると、だいたい見当がついてきそつだ。『義證』によると、「原始以表末」は各ジャンルの起源と変遷を論じたもの、「釈名以章義」はジャンル名称の含意を論じたもの、「選文以定篇」は主要な作品を提示し批評したものの、「敷理以拳統」は筋道をたどりながら理想的ありかたを論じたもの——であるという。たしかに、現存する『文心雕龍』のジャンル論が、そうした内容になっているのだから、ほぼ妥当な解釈だといつてよからう。

だがこの四句、いざ逐語的に日本語につつそうとすると、なかなかむつかしい。一句目の「表末」は、「原始」(源流をこらへる、の意)との関係から、おそろしく「近時までの沿革をのべる」の意だらうが、すくなくともこれ以前に用例がみつからず、やや不安がのこる。おなじく「釈名」「章義」も用例はないが、こちらのほうは

「ジャンルの名称を解釈して、その含意を明確にした」と、字義どおりそのまま訳してよさそうだ。

問題はつぎの二句である。まず「選文以定篇」。この句、ふつうに解すれば、「選文」は「過去の作品をえらんで選集をつくる」、「定篇」は「篇の数や順を確定し、一書として完成させる」の意だろう。ところが「校釈」では、「主要な文人と作品を提示したものの」の意とし、また「義證」では、「各ジャンルの代表的作品をえらんで評定をくわえたもの」と解している。「校釈」が「提示」でとどめていたのを、「義證」は「えらんで評定をくわえ」と、よりつっこんで解しているが、まあ両書とも類似した解釈だといってよい。いずれにしろ、両者ともふつうの語義から予想されるのは、ことなつた意味あいには解している。これは現存する『文心雕龍』各篇の構成や内容を、参照すればこそその解釈だろう。右の訳では、いちおう「義證」にしたがつておいた。

つぎの「敷理以拳統」も難解だ。「敷理」「拳統」ともに用例がみつからない。「義證」によると、この句は「事理を敷陳して（敷理）文章の格式をしめす（拳統）」つまり「各ジャンルの理想的ありかたや標準的な風格を説明することだ」という。ここでは「筋道をたどりながら理想的ありかたを論じた」と訳しておいた。たしかに、現存する各篇をみれば、この解釈でまちがいないさそうだが、しかしもし『文心雕龍』のジャンル論がうしなわれていたら、こう解釈するのはさうとう困難なことだったろう。「上篇以上」とは『文心雕龍』の前半の二十五篇のことをいう。「綱領明矣」と、また「矣」字でつよくいきっているのに注意しよう。

「至於割情析采」からは、後半二十五篇の説明につづる。「割情析采」のうち、「割情」は「私情をすてる」の意で、「析采」のほうは用例がない。これでは前後とあわず意義が不通なので、この四字は「割析情采」（情采を割析する）の互文だとみなしたほうがよい。すなわち「情采」篇を意識しながら、「心情と文采を分析する作品の内容や表現を分析する」と叙しているのだろう。また『范注』によれば、「情」は神思篇以下をさし、「采」

は声律篇以下をさすという。そうかもしれない。つぎの「籠圈條貫」句も難解だ。「條貫」は条理とか体系の意で用例はおおいが、「籠圈」は用例がなくて、意味がとりにくい。ここでは『義證』のひく蒋祖貽氏の説にしたがって、「文章の条理を概括する 創作の道理を概説する」の意と解しておいた。

「摘神性」以下は、後半の篇名（二字）から一字または二字をとりあげつつ、当該の篇の執筆趣意を説明したものである。それゆえ主語は劉勰自身になり、「自分（劉勰）は……とつづいた」という文章である。ところが「崇替於時序」句だけは、「時世のなかで盛衰してゆく」の意なので、主語は 文学一般 だとすべきであり、劉勰を主語にはできない。なぜかこの句だけ、主語がことなるのである。そのためか、たとえば『辨註』は、この句を「以時序篇檢討、歷代時世運會」（時序篇では歴代の世での文学の変転ぶりを検討した、の意）と訳し、「検討」という動詞をおきなう（あるいは、おきかえる）ことにより、強引に主語を劉勰にしたてている。たしかに、この句はそうでもしないかぎり、劉勰を主語にすることはできず、前後の文章とあわないのだ。ということは、この句は文章として不完全であり、劉勰のミスだとせねばならないだろう（論文篇で詳述する）。また「長懷序志」は、「懷いを序志に長くす」と訓じるべきだろう。『辨註』は「將一己之深遠懷抱、寓於序志篇」と訳して「寓」字をおきなうが、原文はこのままでもさしつかえない。「下篇以下」とは、『文心雕龍』の後半の二十五篇のことをいう。ここでも「毛目頸笑」と、やはり「笑」でつよくいいきっている。

つづく「位理定名」句中の「位理」はみなれない語だが、蒋祖貽氏によると、情采篇に「設模以位理」（構想を設定して論理をくみだてる、の意）という用例があり、どつやら「論理をくみだてる」という意らしい（「理を位す」と訓じるのだろう）。そしてここでは「各篇の先後の理を安排する」の意だという。したがって、各篇の排列のしかたをかんがえたと解しておいた。「定名」は「篇の名称を決定する」の意。すると「位理定名」は、

「各篇の排列を按配して篇名をつけた」の意となろう。「彰乎大易之数」三句は、諸家が注するように「易」繫辭上の「大衍之数五十、其用四十有九」（大衍の数は五十であり、じつさいに作用するのは四十九である、の意）をふまえた表現である。なお「彰」は、『義疏』にしたがって「標誌」（しめしている）の意とした。したがって「彰乎大易之数」は、「大易の数（五十）をしめした 大易の数たる五十とした」と訳しておいた。

第六段 執筆方針

夫「銓序一文為易、雖復 輕采毛髮、或有曲意密源、似近而遠。辞所不載、亦不勝数矣。

「弥綸群言為難、 深極骨髓、

及其品列成文、 有同乎旧談者、非雷同也、勢自不可異也。

「有異乎前論者、非苟異也、理自不可同也。

同之与異、不屑古今、擘肌分理、唯務折衷。 按轡文雅之場、亦幾乎備矣。

「環絡藻繪之府、

但言不尽意、聖人所難。 識在餅管、何能矩矱。 茫茫往代、既沈予聞、

「眇眇來世、倘塵彼觀也。

一篇の作を批評するのはたやすいが、多数の作をすべて論じるのは困難だ。たわいない作はかるくふれ、重要な作はふかく論じるようにしたが、複雑な意味やかくれた本質は、わかりそうできて、よくわからない。本書で言及できなかったことは、かぞえきれないほどだ。

過去の作品を論じたさい、以前の批評とおなじこともあるが、それは雷同したわけではなく、異をたてる必要がなかったからだ。また旧時の評価とことなることもあるが、それはでたらめに異をたてたわけではなく、おのずから評価がちがってきたからである。過去の評価とおなじになるうとなるまいと、古今の評判にとらわれることなく、精密な分析につとめ、適正な判断をくだすよう心がけた。こうして文雅の苑をめぐり、美文の府をあるきまわって、批評すべき問題はほほかたりつくしたとおもう。

ただ「言は意をつくさず」というように、完全に意をつくすのは聖人でも困難なことだ。まして見識とぼしき私のこと、どうして本書が「文学批評の」規範となれようか。ただ「本書をつづる過程で涉獵してよんだ」往古の聖賢の書が、私の見聞をあらいきよめてくれたので、とおい将来、心あるかたがお目にとめてくださるかもしれぬ。

この第六段は、『文心雕龍』執筆の方針を説明したものである。いつけん謙虚そうな発言もしているが、じつさいは、ようやく完成したという満足感と、そしてその著への自負とがよくうかがえる内容となっている。

はじめにくる「銓序」云々と「輕采」云々の対偶は、ともにとどのつた反対はんたいである。後者の「雖復すいふく、或有ある」は、「〜ではあるが、〜の場合もある」という対応をなしている。「毛髮」と「骨髓」とは、枝葉的な話題と根本的な話題の比喩ともとれないでもないが、直前の「一文」「群言」が具体論にかたむいているので、「たわいない作」「重要な作」と訳しておいた。「密源」は用例がみつからないが、とりあえず「秘密のみなもとた本質」としておいた。「似近而遠」は諸家が注するよつに、『孟子』離婁上の「道在邇、而求諸遠」（道はすぐそばにあるのに、わざわざ遠所にもとめる、の意）にもとづく表現だろう。また「辞所不載」の「辞」は『文心雕龍』をさすと解した。

「品列」は「品評」の誤とする意見がおおい。たしかに、そっちのほうが意味がとりやすいので、「品評」の意で訳しておいた。つづく「有同乎旧談者」云々の六句は、三句どうしの長偶対である。一見してわかるように、美文では忌避される同字が多用されている。六句のうち、助字の「乎」「也」をのぞいても、「有、同、異、者、非、自不可」が重複して使用されている。こうした、同字を同位置に使用する句法は、詩賦や美文でなく、論難の文におおくみられるものだ。このあたり、「文心雕龍」が文学作品としてかかれたものでなく、議論文たる文学批評の書であることを実感させるものといえよう。

「同之与異」の「之」は、なくてもよかった。いや、ないのがふつつなのだが、四字句にするため埋草的にそえられたのだろう。おかげでこの前後の行文は、整然とした四六の連続となっているのに注意しよう。「擘肌分理」句は、張衡「西京賦」の「剖析毫釐、擘肌分理」（毛先ほどのことも分析し、肉や肌をきりわけるようにしらべる、の意）に由来したもの。

つづく「按轡文雅之場」二句は、劉勰が『文心雕龍』を執筆するために、おおくの文献や作品を渉獵したこと、乗馬の比喻で表現したものである。この二句は同内容をくりかえした正対。一句のみでも意味はとおるので、余分といえば余分な行文だが、いかにも美文らしい措辞だともいえる。「亦幾乎備矣」句は、「校釈」の指摘するように、陸機「文賦」の「蓋所能言者、具於此云」（ことばで説明できるかぎりのことは、この賦中でいいつくされていることだろう）と、意味的によく似た発言だといつてよい。

「言不尽意」句は、『易経』繫辞上伝の「子曰、書不尽言、言不尽意、然則聖人之意、其不可見乎」（孔子はいつた。書は言をつくさず、言は意をつくさない。すると聖人の意中は、しることができないのだろうか、の意）を引用したもの。「餅管」は諸家が注するよつに、「左伝」昭公七年の「挈餅之知」と『莊子』秋水の「用管窺天」

にもとづいて、見識のせまいことの喩としてもちいたもの。ただこの両者を合体させて「餅管」としたのは、これ以前に用例をみないようだ。こつた用語だといってよからう。

いっぽう、「茫茫往代、既沈予聞」二句は、なかなか難解である。下句「既沈予聞」の「沈」を「洗」とするテキストもあつて、そのぶん解釈がよけいに多岐にわたり、聚訟の府といふべき状況になつている。ここではとりあえず「既洗予聞」としたうえで、「涉獵してよんだ過去の聖賢の書が「自分（劉勰）の見聞をあらいきよめてくれた」の意と訳しておいた。そして「眇眇来世、尙塵彼觀也」二句は、かくして完成した「文心雕龍」が、後代のひとの目にとまるやもしれぬ、の意と解しておいた。このように、この「茫茫」云々の隔句対は解釈がむつかしいのだが、いずれにせよ、劉勰のつよい自負がこめられているようだ。すると、その直前の「見識とぼしき私のこと、どうして本書が「文学批評の」規範となれようか」も、一見は謙遜した言いかたのようにみえるが、おそらく本音ではないとせねばなるまい。

第七段 贊

贊曰、生也有涯、無涯惟智。逐物実難、傲岸泉石、文果載心、余心有寄。

「憑性良易」「咀嚼文義」

贊にいう。生は有限なので、いくら人知をつくしても、きわめつくすことはできぬ。「かく人知で」この世の事物を追究するのは、まことに困難であるが、おのが心に依拠して追究するのは、わりとかんたんだ。そこで私は山水に隠遁して、「おのが心で」文学の本質をかみしめてみたのである。文章がひとの心

を表現するとすれば、わが心も本書によって落ちつきをえられることだろう。

さいこの第七段は、韻文による贊。一篇のまとめふう内容がつづられることがおおい。この贊では、自分が人知や立身にとらわれぬ立場にいることをのべつつ、本書をかきおえた満足感をかたっている。ただこの記述は、典故の解釈のしかたによつては、意味が正反対になることもありそうで、劉勰の真意がとりにくい。くわえて解釈のしかたにもよるが、本文たる序志篇の内容と「とくに思想的方面で」一致せず、奇妙な内容となっているように感じられる。

初二句は『莊子』養生主の「吾生也、有涯、而知也、無涯、以有涯隨無涯殆已」(わが生は限りあるが、しることに限りがない。有限の生によつて無限のことをしろつとしても、つかれてしまっただけだ、の意)に依拠したものである。人知ではこの世の事物はきわめつくせぬ、と知を批判した、いかにも道家ふうな議論である。つづく「逐物」二句はそれをつけ、人知でこの世の事物をきわめるのは、きわめて困難なことだが、おのが性情に依拠して追究するのは、わりとかんたんだ、ということだろう。対偶上句の「物」は、この世の事物としてよかるうが、主要には文学の本質をさすのだろう。下句の「性」はなにをさすのか明確でない。おそらく「智」(人知)と反対のものだろうから、とりあえず「心」と訳しておいた。要するに文学の本質は、理屈ではなく直感のほうを理解しやすい、ということだろう。

初四句を以上のように解したが、しかしこの部分は難解で、右のこととなった解釈もすくなくない。たとえば『義疏』は、初二句に対し『莊子』養生主をひねって使用しているとし、「人生は有限だが、知識は無限なので、ひとは文学の本質の追究に努力すべきだ」の意だとする。つづく「逐物」二句に対しても、「仕官をもとめるのは困難だが、文学を批評するのは容易だ」の意に解する。つまり「逐物」仕官をもとめる、「憑性」文学を批評

する」とするのだ。いっぽう『輯註』のほうは、「逐物」二句を、「短促な寿命でもって」無限の知識を追究するのは困難である。だが天賦の才情に依拠して、自分のすなおな靈感をつづるのは、かんたんである」と解する。これら『義疏』『輯註』の解釈、すこし奇矯な感じもなくなはないが、いずれもユニークなものではある。だが同時に、ぜったいそうでなければならぬという論拠もなさそうで、「そうした見かたもありうる」という程度の解釈にとどまるだろう。

つづく「傲岸」二句は、道家ふうな立場をのべている。「傲岸」は気ぐらいがたかいの意であるが、たとえば郭璞「客傲」に「傲岸、荣悴之際、頡頏龍魚之間」（世の盛衰にあくせくせず、龍魚ともにすこす、の意）とあるように、世俗の榮達に汲々とせず自己をたかくたもつの意もある。ここではそうした用法で、「泉石」つまり山水に、隱遁するの意だろう。じっさい、郭紹虞『中国歴代文論選』はこの「傲岸」二句を、「自分では富貴をねがわず、ただ山水に傲岸として、創作の方法について探求し研鑽をふかめたい」と解する。

だが劉勰そのひとは、この序志篇でも、夢で孔子とあえた喜びをかたり、經書の補佐たる文学をあれこれ論じていた。つまりあきらかに儒家的立場にたったひとなのだ。その延長上だろうが、劉勰は儒家ふう経世意欲もきわめて旺盛だった。じっさい、彼は『文心雕龍』完成後、当時の有力者だった沈約にうりこみにでかけ、結果的に仕官するのに成功している。それなのに、ここで山水に隱遁して云々といっているのは、思想的に齟齬があり、違和感がないでもない。

「文果載心、余心有寄」について、やはり『中国歴代文論選』は、「もし文章によって自分の道を表現できるとすれば、わが心はこの書で落ちつきをえられることだろう」と解する。右の訳も、ほぼそのような方向で訳しておいた。